心のキリコに灯を

取材班から ㊦

4月中旬、能登半島の最果て、珠洲市日置地区で、公民館長の古矢孝一さん(66)が語っていた思い出話が忘れられない。戦後、能登を離れた若者たちの道筋がくっきりと脳裏に浮かんでくるからだ。

南を目指した若者

古矢さんの親の世代は、珠洲外浦側の中学を卒業すると現金収入を求めて先を争うように南を目指したそうだ。公共交通網の整備は十分でなく、外浦の若者は里山を越え内浦側の飯田港を目指して歩いた。

飯田から船で七尾へ出て、鉄道で金沢、東京、関西の就職先へと散った。1964年、穴水から蛸島まで総延長61キロの国鉄能登線が全通すると、里山、里海を縫う49のトンネルをくぐり、若者は奥能登を出ていった。

人間は価値を求めて、移動する生き物である。「金の卵」として高度成長を支える労働力となった若者たちが南の空の下で手にしたのは、輝かしい希望だったのだろうか。多くは郷里に戻らなかった。

統計によれば、現在の珠洲市から宝達志水町まで、能登の人口が最も多かったのは1950年の35万人だった。現況は19万人弱である。この70年でほぼ半減した計算となる。

定年後、帰郷した古矢さんは「まれびと」たちに、感傷を極力排するように話した。砂浜でゆらりと揺れるキリコの灯が忘れられなかった、と。

禄剛埼灯台が立つ日置地区。「まれびと」を受け入れる知恵が自治体に求められる＝4月、珠洲市狼煙町（小型無人機から撮影）

連載の狙いの一つは言ってみれば、能登人の心の中に眠るキリコに灯をともすことだった。燃料となるのは、能登に住む人々の誇りである。

心の中に燃えるキリコの灯は、きっと「まれびと」の通り道をあかあかと示してくれる。やってくる「まれびと」は都会生活に疲れた若者かもしれないし、第二の人生を夢見る老夫婦かもしれない。人口減少が深刻化する今、多彩な人々を柔軟に受け止め、土地の力に積み重ねていく知恵が能登の自治体に求められている。

住む誇りが「客人」呼ぶ

神職、僧侶が語り部

取材班が筆を置くに当たり、能登の歴史、営みをひもといてくれた能登在住の学究の皆さんの、さらなる研究進展にエールを送りたい。東四柳史明金沢学院大名誉教授、民俗学研究者西山郷史さんら「語り部」は、それぞれ神職や僧侶の顔を持つという共通項がある。これも能登の奥行きだと受け止めている。

新たな「まれびと」が日本海に突き出した大地に根付き、豊かな土地の物語を紡ぐことを願う。

（宮下岳丈）

＝おわり。写真企画は毎週月曜付に掲載します＝